

東京の演奏会から

オーケストラ

初来日となるシティ・オブ・ロンドン・シンフォニーは、1977年に創設された室内管弦楽団。昨年、リリースされたCD「花は咲く」で同団と共演したチャールズ・ドビュッシーの演奏を聴き、チャールズ・ドビュッシーの指揮は、クラリネット奏者で同団首席指揮者のマイケル・コリンズが務めた。曲目は、同CDより山田耕柞中田直直の日本歌曲を中心に、フインツ「クラリネットと弦楽のための協奏曲」やグレンジャー「ロンドンデリーの歌」など英国の作品を配し、日英文化交流の架け橋としての一端を担う構成。ロスマン・ドビュッシー、以前より積極的に日本歌曲を取り上げているが、自らの確信と思いを音楽の感情の起伏として実現した歌唱といえる。十全とはいえないところもあったが、それぞれの歌曲の心情を浮き彫りにした。そして、コリンズの吹き振りによるフインツは自家筆中の曲とあって、抒情的な風合いを引き出すところに彼ならではの巧みがある。オーケストラも統一感が強く伝わり腰の据わった安定感に実直な職人気質を感じた。(3月9日・オーチャードホール)

東京交響楽団(第82回)
あたたかも良い時代のドイツの名指揮者たちのスタイルを思わせるような、濃厚な響きによるベートーヴェンとワーグナーが久しぶりに再現した感。飯守は、「レオノール」では渾身のテンポで滔々というよりむしろ悲劇の物語への序曲といった雰囲気を生じさせ、また「8番」でも、ユーモア性よりもシリアスで毅然たる風格が先行するという趣をつくり出した。一方、後半のワーグナーの作品群に入ると、表情は俄然闊達で奔放なものとなり、金管を猛然と咆哮させての重厚な力感あふれる音楽構築。いずれも飯守の個性が充分で、自らの指揮スタイルを頑固に守り通す彼の面目躍如だ。

東京ニューシティア管弦楽団(第11回定期)
指揮は内藤彰。テーマは「ラストモーツァルト」。最後のオペラ序曲「魔笛」序曲、最後の交響曲「ジュリエット」(レクイエム)で、さらに「レクイエム」はレヴィン版アーメン・フーガをコーダに用いた。今回も凝ったプログラムである。今も凝ったプログラムである。今も凝ったプログラムである。

クアルテット・エクセルシオ
モーツァルト三昧の一日である。モーツァルトとその周辺がテーマになったクアルテット・エクセルシオの公演は、「フィガロの結婚」序曲で華やかに始まり、続いて16歳のシューベルトの手になる「弦楽四重奏曲第6番」へ。豊かな歌心が素晴らしい。モーツァルト「弦楽四重奏曲第17番」では、エクセルシオらしく緊密なアンサンブルによって、生き生きとした情感を引き出してみせた。日本では数少ない常設のカルテットであり、このあたりの緻密な音楽づくりはさすがである。後半はまず珍しい曲が披露された。モーツァルトと旧知の仲だったシューベルト「二重奏曲第一番」で、もとは2本のクラリネットのための曲だが、今回はヴィオラとクラリネット版。ここから登場した澤村康恵が気品のある音色で魅せた。最後のモーツァルト「クラリネット五重奏曲」は庄蓄だった。澤村の存在も際立っていたが、それにも増してカルテットとクラリネットとの見事に融和した響きが美しかった。(3月12日・第一生命ホール)

トッパンホール・アンサンブル
気鋭の奏者トベテフとの共演で、モーツァルトとベートーヴェンのいくぶん深いプログラムが輝きを放った一夜だった。トッパンホール・アンサンブルの第10回の公演はまず

な、濃厚な響きによるベートーヴェンとワーグナーが久しぶりに再現した感。飯守は、「レオノール」では渾身のテンポで滔々というよりむしろ悲劇の物語への序曲といった雰囲気を生じさせ、また「8番」でも、ユーモア性よりもシリアスで毅然たる風格が先行するという趣をつくり出した。一方、後半のワーグナーの作品群に入ると、表情は俄然闊達で奔放なものとなり、金管を猛然と咆哮させての重厚な力感あふれる音楽構築。いずれも飯守の個性が充分で、自らの指揮スタイルを頑固に守り通す彼の面目躍如だ。

東京ニューシティア管弦楽団(第11回定期)
指揮は内藤彰。テーマは「ラストモーツァルト」。最後のオペラ序曲「魔笛」序曲、最後の交響曲「ジュリエット」(レクイエム)で、さらに「レクイエム」はレヴィン版アーメン・フーガをコーダに用いた。今回も凝ったプログラムである。今も凝ったプログラムである。

クアルテット・エクセルシオ
モーツァルト三昧の一日である。モーツァルトとその周辺がテーマになったクアルテット・エクセルシオの公演は、「フィガロの結婚」序曲で華やかに始まり、続いて16歳のシューベルトの手になる「弦楽四重奏曲第6番」へ。豊かな歌心が素晴らしい。モーツァルト「弦楽四重奏曲第17番」では、エクセルシオらしく緊密なアンサンブルによって、生き生きとした情感を引き出してみせた。日本では数少ない常設のカルテットであり、このあたりの緻密な音楽づくりはさすがである。後半はまず珍しい曲が披露された。モーツァルトと旧知の仲だったシューベルト「二重奏曲第一番」で、もとは2本のクラリネットのための曲だが、今回はヴィオラとクラリネット版。ここから登場した澤村康恵が気品のある音色で魅せた。最後のモーツァルト「クラリネット五重奏曲」は庄蓄だった。澤村の存在も際立っていたが、それにも増してカルテットとクラリネットとの見事に融和した響きが美しかった。(3月12日・第一生命ホール)

ハンブルグ・トリオ
音楽評論家、奥田佳道の酒脱なトークに導かれてシューマンの室内楽をたっぷり聴ける。午後のひととき、まず「ピアノ三重奏曲第2番」第一楽章の第2テーマが美しかった。ピアノのE・ハーゼンブラッツの太い音が、弦楽器を包み込む。極めて音楽的で音色も豊か。塩貝みつるのヴァイオリン立奏は、最初はチェロとの距離を感じたが、だんだん音楽の会話が増くなってゆく。次の「同第3番」が最も面白かった。三者が散り散りな方向性に向いていても一瞬で収束し丁寧な影絵化した。同第一番」では、チェロのV・ソンドキスが、優れたテクニクにより涼やかに作曲家独特の難フレーズを語り尽くす。「ピアノ四重奏曲」では、読響の柳瀬省太が音色的にも良く溶け込んで好演。節度のある第2ヴァイオ

のドヴォルジャーク「ユモレスク」は心温まるものがあった。(3月14日・東京芸術劇場コンサートホール)

日本フィルハーモニー交響楽団(特別演奏会)
「ロンドン」に仙台フィルでロシア音楽プログラムを指揮したばかりの山田和樹が、正指揮者を務めること50日本フィルでも、グリンカの「ヘルスラント」(ユドミラ)序曲、ラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」(ソリストは福岡光太郎)、チャイコフスキーの「交響曲第4番」というロシア・フウガを指揮した。金管群をダイナミックに小気味よく高鳴らせ、明晰なリズム感で躍動する演奏をつくる彼の指揮は、欧州での活動が増え来た最近、いっそう際立って来たようである。この日の序曲でも、交響曲でも、それが胸のすくような効果を発揮していた。基本的にはストレートな演奏構築だが、「4番」第4楽章の第3主題のみを突然アンボを落して演奏する、という大芝居を見せることもある。

ロイスダール弦楽四重奏団 & チャールズ・ナイディック
1966年にオランダのハーグで結成され、同国の有名な風景画家の名前に由来するロイスダール弦楽四重奏団の初来日公演。ゲストにクラ

北村朋幹 vc & 上野通明 vc & 北村朋幹 p - ピアノ・トリオのタベ
注目される気鋭のアーティスト、ヴァイオリンの山根仁二とチェロの上野通明。そしてピアノの北村朋幹によるピアノ・トリオのタベ。3人は以前にも共演している。現在、山根はミュンヘン音楽演劇大学に、上野はドイツでウィスベルグに、北村はベルリン芸大に学んでいる。当夜は、ラヴェル「ピアノ三重奏曲」& チャイコフスキー「ピアノ三重奏曲」作品50。ラヴェルでは、鮮烈な輝きとエッジの効いた音でシャープな音楽を生み出した。才気に満ちたヴァイオリンの艶やかな調べと、瞑想的でありながら作品の構造を堅固に築き上げるピアノ、そしてチェロは楽器を的確に捉えながら音楽に寄り添うように伸びやかに歌い上げてゆく。時には激しく拮抗しつつも三者の音の対話は絶妙に距離感と緊張感を保ち、ダイナミックな音楽を創出してゆく。即席のトリオならば、このような緊密なアンサンブルはなし得ないであろう。後半のチャイコフスキーでは、がりりとその表情を変えた。重くのし掛かるようなピアノに導かれて音楽は始まる。密度の高い音の「コミュニケーション」は、あの暗いパッションを漲らせ、濃厚なロシアの叙情性に満ち溢れた演奏を生み出す。きわめて充実した内容の演奏であった。(3月20日・みなとみらいホール小)

ロイスダール弦楽四重奏団 & チャールズ・ナイディック
1966年にオランダのハーグで結成され、同国の有名な風景画家の名前に由来するロイスダール弦楽四重奏団の初来日公演。ゲストにクラ

ロイスダール弦楽四重奏団 & チャールズ・ナイディック
1966年にオランダのハーグで結成され、同国の有名な風景画家の名前に由来するロイスダール弦楽四重奏団の初来日公演。ゲストにクラ

ロイスダール弦楽四重奏団 & チャールズ・ナイディック
1966年にオランダのハーグで結成され、同国の有名な風景画家の名前に由来するロイスダール弦楽四重奏団の初来日公演。ゲストにクラ

ウエルズ弦楽四重奏団 & 金子平
当夜は、後半のブラームス「クラリネット五重奏曲」Op.115第2楽章から、金子平の節度のあるクラリネットに弦楽四重奏が彩りを添え、あるときは現象を一体化して、この作曲家の晩年の心情を表現し始めた。ウエルズSQが実力を発揮した。ウエルズSQが実力を発揮した。ウエルズSQが実力を発揮した。

ウエルズ弦楽四重奏団 & 金子平
当夜は、後半のブラームス「クラリネット五重奏曲」Op.115第2楽章から、金子平の節度のあるクラリネットに弦楽四重奏が彩りを添え、あるときは現象を一体化して、この作曲家の晩年の心情を表現し始めた。ウエルズSQが実力を発揮した。ウエルズSQが実力を発揮した。

ウエルズ弦楽四重奏団 & 金子平
当夜は、後半のブラームス「クラリネット五重奏曲」Op.115第2楽章から、金子平の節度のあるクラリネットに弦楽四重奏が彩りを添え、あるときは現象を一体化して、この作曲家の晩年の心情を表現し始めた。ウエルズSQが実力を発揮した。ウエルズSQが実力を発揮した。

ウエルズ弦楽四重奏団 & 金子平
当夜は、後半のブラームス「クラリネット五重奏曲」Op.115第2楽章から、金子平の節度のあるクラリネットに弦楽四重奏が彩りを添え、あるときは現象を一体化して、この作曲家の晩年の心情を表現し始めた。ウエルズSQが実力を発揮した。ウエルズSQが実力を発揮した。

ウエルズ弦楽四重奏団 & 金子平
当夜は、後半のブラームス「クラリネット五重奏曲」Op.115第2楽章から、金子平の節度のあるクラリネットに弦楽四重奏が彩りを添え、あるときは現象を一体化して、この作曲家の晩年の心情を表現し始めた。ウエルズSQが実力を発揮した。ウエルズSQが実力を発揮した。

イザベル・ファウスト vn
バロック弓を使った無駄のない滑

イザベル・ファウスト vn
バロック弓を使った無駄のない滑

イザベル・ファウスト vn
バロック弓を使った無駄のない滑

イザベル・ファウスト vn
バロック弓を使った無駄のない滑